

★ 文字が読めるようになった頃

「子育て日記+」その3

1988年、冬

「文字が読めるようになると、その他のことをあまり見なくなる。」これは、かおるの1歳上の龍太くんのお母さんが言っていたことです。そんなものかなと思っていたら、本当にそうになりました。

かおるは3歳1カ月から、世田谷という郊外の、それも周囲にまだ畑の残る土地で生活するようになりました。借家の隣のほったらかしの植木畑は、保育園がお休みの日にはちょうどよい遊び場になりました。「タンポポの花が咲いたよ、春だねお母さん」「鳥さんが木の実たべてた」とか、夏のあいだ台所の窓にやってきていたヤモリがどうして来なくなったのかと心配したり、「あそこのおうち、木を切っちゃった」と残念がったり。土地柄のせいからか、自分の身の回りの自然の変化に気がつく子どもに育っているように見えました。



家の隣の野菜畑・植木畑で、夫、耕平、かおる



近所の畑で従兄弟たちとジャガイモ堀り

ところが、半年ばかりたったころ、急に文字ばかりに関心を示すようになってしまったのです。

道路標識を見ては「3と0だ!」「あれは4って読むの?」

私が新聞を読んでいると、割り込んできて「かおるの『か』!」と指差し、テレビを見ていると、番組の途中で「A!」と叫びます。夕食の支度をしている最中にも、紙と鉛筆をもってきて字を教えてちょうだいとやってきます。静かだなあと考えると、父親にももらったノートに何やら一生懸命に字を書いています。

親の心理としては、我が子が文字をどんどん覚え、数を数えられるようになるのは決してうれしくないわけではなく、数字が読めれば次はひらがな、ひらがなが読めればカタカナ、漢字、そして早く本を読めるようにと、いろいろ教え込みたい気持ちに陥りがちです。近頃は、「漢字教育は幼稚園から」とか「三歳児からの英才教育」といった新聞雑誌の広告や、ダイレクトメールが目につくようになりました。

しかし、気になるのは、文字に関心が行くようになったら、ほかのことにあまり興味を示さなくなったことです。以前なら、道を歩いていたらきっと興味を示したであろうトンボや可愛い猫、畑の隅に咲いているコスモスが目に入りません。ですから、つぎからつぎへと新しいことを詰め込んだら、子どもは周りのことに目が向けられなくなるのではないかと心配になるのです。

文字や数、さらには算数や国語といった教育があるのですが、それ以前に（あるいはそれと同時に）育てておかなくてはならないことがある気がします。例えば、さまざまなものに興味を持ち調べてみる態度とか、

生き物や自然環境を大切にす気持ちとか、友達を大切に弱いものをいたわる心とか・・・そういったものは、頭で考えてそうするということではなしに、感情として湧き上がってくるような、また行動力として培われているものになっていなくてはいけないと思うのです。

かおるは幸い2～3カ月の文字一辺倒の生活から脱して、この頃は、また元のように植木畑で遊ぶようになりました。いろいろなものに興味を示しはじめ、難しい質問をして親を困らせるようにもなりました。

「星はどうして落ちてこないの?」「赤ちゃんはどうやってお母さんのおなかに入るの?」etc.etc.

文字に興味は薄れたわけではなく、私がこうして書いている傍らで、何やらノートに書いています。

『と』っていう字がどうしても逆さまになっちゃう～とわめき声が聞こえてきます。もちろんこれもかおるの意欲の表れです。「うるさい」などと言わないようにしなければなりません。

学習意欲をそがないように、かといって、そのことばかりに陥らないように見守っていきたいと思います。

* * * * *

2015年1月

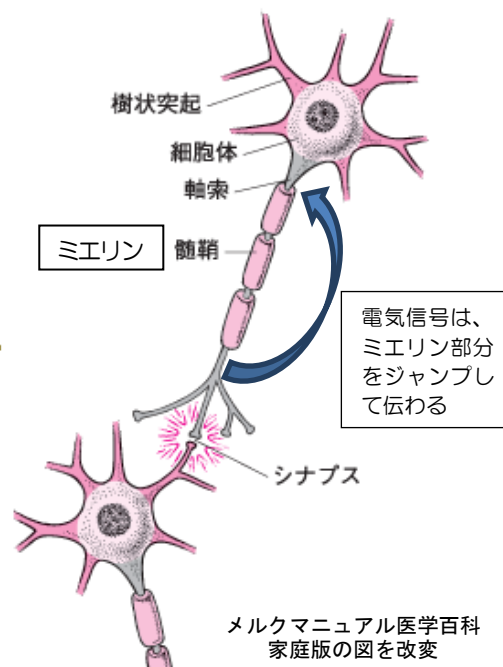
子どもをどのように学習させていったらよいか、そのヒントになるTV番組を見ました。(うちの子もたちにはもう間に合いませんが・・・)

NHKスペシャルの「人体 ミクロの大冒険」。昨年の春に放送されたもので、ご覧になった方もいるでしょう。番組の中で、人間の脳の学習メカニズム、つまり、人間がどのようにしていろいろな行動ができるようになるのか、その仕組みが紹介されていました。

脳の中には800億といわれる神経細胞があり、その神経細胞のつながりと、そこを電気信号が行きかうことで人間の行動は成り立っています。行動したときに発生する電気信号により、関係し合った神経細胞がつながります。神経細胞のネットワーク化です。

10歳ぐらいまでの、シナプスで神経細胞がつながるネットワーク化と、それ以後の細胞の軸索をミエリン(髄鞘)という層でくるんでいくことによって、高速な情報伝達が実現されていくということでした。右の図で、赤いソーセージのようにになっているものがミエリンです。(実際には脂肪の多い白い物質です。)その中に電気信号を伝える軸索があるのですが、ミエリンでくるまれているところは、電気信号はジャンプしてその先に伝わるので、情報伝達が高速化するのだそうです。

そして、この神経細胞ミエリン化というものは、好奇心をもって自分からいろいろなことにチャレンジすることにより、「より進む」ということでした。



神経細胞のネットワーク化、ミエリン化、そこからわかるのは、「脳は経験を蓄積していくものである」ということ、そしてそれは、自ら意欲をもって行動するほど促進されるということです。

ここから汲み取るべきは、子どもはできるだけ、さまざまな体験をさせること、いろいろなことに興味を

持たせチャレンジさせることが重要だ、ということだと思います。

逆に、教師→生徒のような一方通行の単純な学習、ただ机に向かって勉強させているばかりでは、脳の成長には早く限界が来る。「十で神童、十五で才子、二十過ぎればただの人」とは、こういうメカニズムがつくる現象だったのかと、合点がいきました。(了)

*「子育て日記^{プラス}十」

“十”は、子育て中の出来事について書き留めておいたことに、あとで一步引いて考えたり観察したりしたことを追加したという意味でつけたもの。核家族の我が家、子育て中は試行錯誤の毎日でした。しかし、今あらためて読み返してみると、実に愉快で楽しい日々だった、そして何より自分自身の目を育てた年月だったと感じます。(やぐちみどり)